

「災害」とともに生き そして歩む
「今は 次の災害の前だ!!」



富山県水見市 八代環境パトロール隊 隊長 森杉 國作

1 昭和39年の胡桃地区の地すべり

地震大国日本が、何時発生するのかわからない災害を、不幸な事だが生涯を通して心に留めて生きなければならない。対策を人に委ねるのではなく、自らが自覚を持って自然災害から身を守ることに努めなければならない。

私共の地域は、古今からの地すべり地区で、幾度となく災害に見舞われ、村民の心に教訓として根強く生かされ今日に至っています。

昭和29年の城戸地区（茅の採集場所）の崩壊、36年の国見地区（山一体の災害）、42年の針木地区（兆候から災害まで、期間有）の災害もありましたが、中でも昭和39年の「胡桃地区の地すべり」は今も語り継がれており、災害に対する意識が非常に強いものがあります。

地すべりは、昭和39年7月16日の正午頃に、遭遇した私は、戸数87戸の集落「村が」、
「人家が」、
「樹木が」私の立つ目の前を土砂と共に流失し、同時に木を引き裂く音、家が崩れ落ちる音、地中の岩が擦り合う音、人々の何とも言いようのない悲鳴にかき消され、土砂に飲み込まれて消えた家々の様子は残酷そのものでした。

この災害で村民の90パーセント以上が家を失い、路頭に迷う日々を送り、町に住家を求める者、県境を越えた石川県鹿島郡（現、中能登町）に移住する者、その他の地区に親類

を頼り移住する人など、今思い出しても身震いのする思いです。災害救助法、が適用された地すべりでした。

2 八代環境パトロール隊の結成

私が地域防災、防火に思いを寄せるのはその時のことが脳裏から離れず、人生を懸けて地域貢献に関わって行くことを固く心に思っていたからです。

退職と同時に地域の自治会長になりました。学校統合があり、地区に公共の施設が無くなりました。申し訳なく心が痛みましたが、地域の存続に向けて一層励む事を心に誓いました。

少子高齢化に伴い人口減少が進み、心のどこかに隙間が出来、高齢者には人生を振り返ることの憂鬱さが日々の生活の中に潜み、人と関わりたくない、人の話を聞こうとしない態度が見えて来ました。

かたくなに閉ざした心の扉を開くために、「勇気を与え」「希望を持ち続け」「感謝と感動の人生」を、と語りました。そんな折に故郷の安全を厳守すべきと思い、平成13年に八代環境パトロール隊を結成しました。「環境保全」「安心・安全」「防災・防火」「防犯」を守ることを目標としました。

結成以来16名の隊員が一致結束して、16年間地域活動に励んでいます。

隊員は愚直なまでに地域の発展に逼進し、



パトロール隊、出発前ミーティングで危険箇所の再確認。



地域内の状況を周知し、対策をまとめるため協議中。



高齢者宅を訪問し防火を注意。心配ごとを聞き安心して頂く。



雪崩現場にて対応確認中。

頑なに村民の為に尽くしています。まず始めたのは、林道12キロメートルの草刈り奉仕です。隊の運営資金を捻出することも然ることながら、自然災害の未然防止に力を注ぎました。

現在までに約18か所の災害現場を早期発見、担当課に連絡し復旧出来ました。針木地区の県道決壊の折には早朝のことであり、県に早速連絡し、村民には迂回路の図表を作製、各家庭に配布し周知致しました。道路下の集落には即刻連絡し避難を呼びかけたこともあります。



無線交信をする隊員。本部から各隊員に情報伝達の訓練。



年末特別警戒（12月29日～31日）激励を受ける。

3 無線機とバスの活用

そんな活動を通して苦心したことは、地域内で携帯電話交信が出来ない不感地帯が沢山あったことです。何とか問題を解決したいと思い、無線機22台の活用を取り入れ、本格的な活動体制が整いました。

早速地域内に40か所（1～40）の無線連絡場所の看板を設置し、隊員はその地点から本部に無線連絡する体制が確立されました。災害の発見の折は即刻本部に無線し、担当課に連絡しています。

我々の活動は他に「NPO法人地域活性化協議会」を設立し地域バスの運営を始め本年度12年になります。全て安定した内容でしかも乗車率が高く、正に動く談話室的なバスです。バスにも無線機を搭載し高齢者の身辺警護に万全な体制を図っています。

地域の自主防災訓練に至っても10年前から無線機を活用した訓練を実施し、パトロール隊員が主体となり指導に当たっています。地

域を3地区に分け、村民の参加しやすい体制とし、訓練も各地区に合った内容として現実に即対応出来るよう生活に合った訓練が自慢であります。

隊員で地域内にドクターヘリのランデブーポイントの場所も建設しました。現体制では救急車を呼んで、病院に搬送する方法を取っていますが救急患者の受け入れ病院が定まらないことなど時間のロスがあり、「村民の救える命は順守する」、ことを最重要視しています。こうした我々の活動が認められ平成16年1月7日に第8回防災まちづくり大賞を受賞することが出来ました。

過疎を払拭し不幸な地域と思わないよう明るい村づくりに邁進しているのが何よりも自慢であり、村民の誇りでもあります。志賀原子力発電所（30キロ圏内）も近く、原子力災害に不安を抱くこともありますが、村民にはそれ程危機感は無く、村内に観測所も建設され対応に配慮されています。訓練に至っても地域バス3台を常に対応できる体制であり村民の不安解消に努めています。



ドクターヘリ離発着場の建設。



滋賀原子力発電所八代観測所。周辺の整備。

4 終わりに

「日本防火・防災協会」の、弛まぬ情報発信の努力と防災未然防止に努め、まちづくり大賞20年を迎えたことを心から祝福すると共に、今後益々の御発展をお祈り申し上げます。我々の活動が広く日本の隅々までお知らせ頂けることに、隊員に取って苦勞が報いられる思いであります。

今後もお一層努力精進し、地域活動に励んで行くことをお誓い致します。